



## 志村官介

### 『多田銀銅山 見学記』

天平時代に銅山として開発されたとの伝承がある多田銀銅山を見学する機会に恵まれました。この鉱山は兵庫県川辺郡猪名川町にあり、昔は摂津の国と云われました。

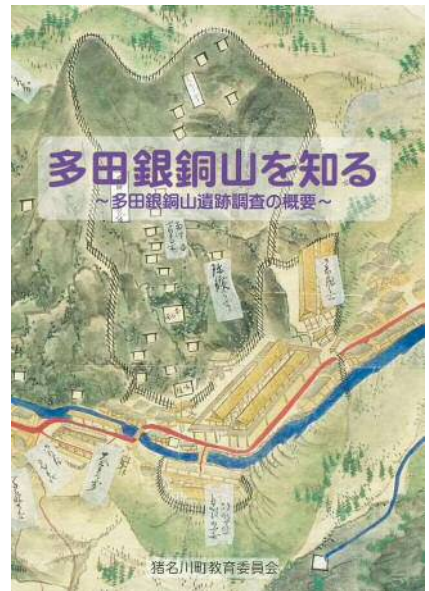
2014年 3月 2日、妙見山麓遺跡調査会（兵庫県多可郡）の会員による見学会です。山陽道の姫路東から中国縦貫道の宝塚インターを降り、東へ、北へ、西へ、ぐるっと回り約2時間、山の中の静かな場所に到着。道路不案内でしたが、間違っただのはインターの出口で1回、無事予定の時間に到着しました。事前の案内には、持物として手袋・長靴・タオル・懐中電灯と弁当と書いてあり、坑道の中まで入ることが予想されました。集合場所は「悠久の館」、すでに到着されていた神崎 勝先生に「やはり長靴がいいですか?」「そうしなさい。」長靴を履きました。参加者全員（8名）が揃うまで、上の広場で明治時代に操業した堀家（島根の鉱山家）の製錬所の赤黒いレンガで出来た溶鉱炉と、製錬時に発生したカラミ（製錬カス）を見ました。レンガ型のカラミは一部鉄を含んで、持っていた強力なネオジム磁石に反応しました。

顔見知りのメンバーが『鍛冶屋さんがどうして銅に興味を持つのですか?』こう聞かれて長い説明をすることになりました。『鉄のふしぎ博物館』を開設する3年ほど前に大阪から来訪者がありました。『奈良県の南東部に位置する上北山村近くの峡谷には磁石に強くつく石コロがたくさんあります。これですが、どこへ行っても誰もこの茶色い塊が何か教えてもらえません。そこでここに持って来たのです。』持ってみると重い。わずかに溶けた跡がある。『これ銅を作った時に出る、カラミ（製錬カス）です。』こんな風に答えましたが、素人が分析もせず断定するのはおこがましい事で、間違っていれば問い合わせ頂いた相手に迷惑をかけます。伝手を頼って、九州大学の鉱山学の教授に調べて頂く事にしました。『手が空いた時でよければ分析するよ。』こんなお願いから2年半、カラミの中に鉄がかなり多く含まれているとの結果を教わりました。これ以来、銅鉱石や銅製品を見ると磁石を近づけることにしています。

悠久の館で『多田銀銅山を知る』と題されたA4の大きさ4枚（8ページ）のパンフレットを頂き、町役場の担当者に歴史と鉱物、遺跡の説明をうけました。展示場には銀銅山の範囲、ゆかりの人々、代官所跡の遺跡調査、江戸時代の絵図・古文書などが展示され、又、銀銅山での、採掘・選鉱・製錬・銀の抽出などの工程が描かれていました。

いよいよ、坑道などの散策です。前日はあいにくに雨、昔の鉱山跡はぬかるんでいました。「この上にも小さな坑道があるよ」「上がってみよう、そう云う見学者の一人」私もついて上がりましたが、細い谷筋の道なき道です。「もうすぐそこです。」あえぎながら登る私に応援の声。「瓢箪間歩」「台所間歩」「大露頭」「金山彦神社」「代官所跡」「銀山橋」たくさん見て歩きました。

銀山概略図



『鉄のふしぎ博物館』

来て！見て！ふれて！ ふしぎ体感

鉄を見る目がかかりますよ。

ぜひお越しください。

